

## 予備合宿のおる一日 (三国峠越) (鈴木俊明)

何を書けばいいものかと、今年一年振り返ってみると、一番先に思い出すのが、予備合宿。特に第1回。何しろきつかった。今まで一番きつかったのが、2年前の予備合宿(明神、三国峠)。今年の夏までは、もうあんなきつい所は走る(押す?)事はないだろうと、半分位忘れかけていたのだが、今回の予備合宿で、名前も同じ、中味も同じ、三国峠(中津川林道)へ行くと、事になってしまった。

何しろ、長い(30km)、砂利道、急勾配と三拍子揃っている。特に長いというのがよくない。はやくも、峠から、約10km位前から、自転車をこごがしていった。その時点で、午後2時頃だったから、出発前に配布された青焼の予定表ではもうそろそろ峠に着いていいる事になっている。

それにしては、富士五湖の明神、三国の道と、まるでそっくりじゃないか。道が曲がる毎に、山かげからまた新しい坂道があらわれてきて、進んでも進んでも峠に近づいていくという気がしない。このまま進んでゆけば、そのうち峠に着くはずなんだけれど、峠に立つ自分を想像しようと思っても、そんな事はこの先いつまでもありえないような気がしてくる。

道がつつら折になっていて、はるか下まで見える所で、下にいる誰かと、またさらに下にいるだれかが大声で叫び合っ

ていた。先頭は、林直入口付近でもう見えなくなったから、先頭と最後尾は1時間以上離れているらしい。

というような事を考えながら、ただひたすら自転車を押してゆくと、どうにかこうにか峠に着いた。全員が峠に着いたのはもう5時前後だったと思う。峠の向うで合流するはずの名取も、待ちくたびれ終って、我々がもう来るものだろうと思っていただろう。これで一日の労働を終えて月々としたという思いだった。が、そう簡単にほっとしてはいけなかった。

砂利の上降りには苦しみがあるのと同様に、砂利の下りにはバコウという厄介な物があったのだ。それも、一回の峠の下りで延べ五六人近くが。一人目(確か鈴木1年)の時は、やはり一人位はと思った。二人目の時もそう思った。最後尾を下っている時、カーブで誰かが自転車を倒してチェーンを入れ替えている、それが終ってしばらく下るとまた2、3人が止まってごそごそやっているという具合だった。

そんなわけで、名取と合流できたのは、暗くなる直前だった。10時半から待っていてもうお疲れ果てたのか、名取はにこにこ笑いながら「赤まえら何やってたんじゃー。」と僕達を叩いた。本当に長く感じた一日だった。

